法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-08

『おもろさうし』の動詞再考

間宮，厚司

(出版者 / Publisher)
法政大学文学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要
(巻 / Volume)
49
(開始ページ / Start Page)
47
(終了ページ / End Page)
65
(発行年 / Year)
2004-03-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002913

Hosei University Repository

『おもろさうし』の動詞再考

間宮厚司

はじめに

ここで論じる内容の一部は、小稿「『おもろさうし』における四段動詞の再構連用形について」（『沖縄文化』第六一号、一九八三年九月）で、かつて考えたことがある。そこでは、以下の点を確認した。

沖縄の古代歌謡集『おもろさうし』（一五三一～一六二三年、全二二巻）では、〈四段動詞＋助詞テ〉のテの表記が、四段動詞の活用する行の違いによって、「ちへ」と「て」で書き分けられている。

A〈四段動詞＋テ〉の「ちへ」表記例

カ行→おちへ（置きて）・きちへ（聞きて）・ひちへ（引きて）・ふちへ（吹きて）

サ行→おちへ（押して）・さちへ（差して）・おとちへ（落として）・かくちへ（隠して）

タ行→うちちへ（打ちて）・うちへ（打ちて）・もちちへ（持ちて）・もちへ（持ちて）

Hosei University Repository

B〈四段動詞＋テ〉の「て」表記例

ハ行→あて（合ひて）・おもて（思ひて）・ねがて（願ひて）・むかて（向かひて）

マ行→つで（積みて）・おがで（拝みて）・こので（好みて）・やすで（休みて）

ラ行→とて（取りて）・いのて（祈りて）・つくて（作りて）・ほこりて（誇りて）

このように、Aのカ・サ・タ行の場合には「ちへ」（タ行は「ち」が脱落していない例もある）表記、Bのハ・マ・ラ行の場合には「て」（マ行は「で」）表記になっている。この書き分けの区別は、脱落した連用形の語尾を再構し、語を認定する際に役立つ。例を示そう。

なちへ（成して）――なて（成りて）

かわちへ（交わして）――かわて（変わりて）

こちへ（漕ぎて）――こて（乞ひて）

まわちへ（回して）――まわて（回りて）

もどちへ（戻して）――もどて（戻りて）

二十年前に書かれた前稿は、現時点から見直すと、いくつかの不備な点を含む大雑把なものであった。本稿では、そこで詳しく検討を加えることのできなかった、再考を要する動詞について論じたい。

なお、論述する際に、左記のテキストおよび先行研究を主に参照した。

Hosei University Repository

外間守善・西郷信綱『日本思想大系18・おもろさうし』（岩波書店、一九七二年一二月）
外間守善校注『おもろさうし㈠・㈡』（岩波文庫、二〇〇〇年三月・一一月）
高橋俊三『おもろさうしの動詞の研究』（武蔵野書院、一九九一年一月）

また、原文については、外間守善・波照間永吉編著『定本おもろさうし』（角川書店、二〇〇二年二月）の定本本文に原則として従った。

一

まずは、外間守善・西郷信綱『日本思想大系18・おもろさうし』（以下、『思想大系』と略す）と、外間守善校注『おもろさうし㈠・㈡』（以下、『岩波文庫』と略す）とで、解釈が変更された例を取り上げる。

ⓐ又　しけち　いぢやせ　もていきや
　　御さけ　いぢやせ　もていきや（巻一四―一〇二五）

右の「もて」を、『思想大系』では「持て」とするが、『岩波文庫』のほうではこれを「盛て」に改めた。このことに関して、高橋俊三『おもろさうしの動詞の研究』（以下、『動詞の研究』と略す）は、三一八頁で次のように記す。

＊「もて」を、『辞典』と『全釈』は「持って」とし、『伊波全集』（第五巻四二五頁）は「盛って」とする。後

Hosei University Repository

者が穏当であろう。

つまり、先の書き分けの事実を踏まえれば、「もて」とあるのだから、タ行四段動詞の「持ちて」ではない。なぜなら、「持ちて」の場合には次のように「もちちへ」あるいは「もちへ」と表記されており、「もて」表記の例はまったく見出せないからである。

一　つくしだまみたま　しまかねる　みたま　こくらのてもち　もちちへ　みおやせ

又　つくしおそいみたま（巻一二―六九二）

◎『岩波文庫』の大意⇩筑紫（九州）の宝玉は、筑紫を支配する宝玉は、島を囲い統べる宝玉である。たくさんの手持ち玉を持ってきて、国王様に奉れ。

一　きこゑなかぐすく　たまのみつまわり　まわちへ　もちへ　あぢおそいに　みおやせ

又　とよむ中ぐすく（巻一二―四八）

◎『岩波文庫』の大意⇩名高く鳴り轟いている中城は、三連の勾玉を廻して持って、按司様に奉れ。

そこで、「もて」表記を「持ちて」ではなく「盛りて」と解釈すれば、ラ行四段動詞になるから、助詞が「て」と書かれていることにも抵触しない。しかも、『おもろさうし』に「酒を盛る」という表現例が見られるので示そう。

一　あかのこが　いぢへな　おて　みれば　みやきぜんは　御さけど　もりよる（巻一七―一二一六）

Hosei University Repository

◎『岩波文庫』の大意⇩阿嘉の子が伊是名に居て遠望すると、今帰仁はお酒をぞ盛って栄えていることだ。

又　ふよわ　御さけ　もる

又　なつは　しけち　もる（巻一一―六四三）

◎『岩波文庫』の大意⇩冬は御酒を盛り、夏は神酒を盛る。

以上、ⓐの「もていきや」は表記と文例から、「持って行こう」から「盛って行こう」に修正されたのである。ただ、「お酒を盛って行こう」よりも「お酒を持って行こう」のほうが、表現として自然な印象を受けるというのもわからないではない。けれども、内省のきかない古代歌謡なだけに、表記の決まりと例文を手がかりに検討すれば、「もて」は「盛って」が正しいという結論（「酒盛り」という言い方も参考）になる。

二

ここからは、『思想大系』および『岩波文庫』で共通の語釈を行っているもので、筆者が再考を要すると判断した動詞を見ていく。

ⓑ一　おもろねやがりや　せるむねやがりや　みちへ　いぢゑ　おもかげど　たちよる（巻八―三九六）

◎『岩波文庫』の大意⇩……勝れた方を見て、行って、その方の面影ぞ立ち居ることです。

Hosei University Repository

一　ねやがりぎや　おもろ　かまゑ　はやく　いぢへ　おぎもに　しなわに（巻八―四一〇）

◎『岩波文庫』の大意⇩……領主様の所へ貢物を早く持って行って、お心に撓おう。

一　あかのこが　大里　いぢへ　大ざとのおもいいぢへてだ

又　ねはのこが　しま尻　いぢへ（巻八―四三七［重複オモロあり］）

◎『岩波文庫』の大意⇩阿嘉の子、饒波の子が、大里、島尻へ行って、……領主である大里按司の懐かしく思い出すことのできる立派な方であることよ。

又　くむさうずやちよむ　みちへいぢへ　いき　ぬばまし

又　くたるつぢやちよむ　みちへいぢへ　あよ　ぬばまし（巻一一―五五七［重複オモロあり］）

◎『岩波文庫』の大意⇩美しい清水さえも、見て行って命を伸ばしたい。踏んだ頂でさえも、見て行って心を伸ばしたい。

又　かなやさき　はちへいぢへ

又　みるやさき　はちへいぢゑ（巻二一―一五〇〇）

◎『岩波文庫』の大意⇩かなや崎、みるや崎に走って行って、

傍線を引いた「いぢへ・いぢゑ」は、『思想大系』『岩波文庫』どちらも「行って」で解している。そして、『動詞の研究』を見ると、三三頁に次の記述がある。

Hosei University Repository

仲宗根政善氏は「現在、カ行四段系動詞の接続形で、濁音となっているのは、この一語だけである。（中略）おもろ時代には、すでに、濁音になっていたのかどうか」と問題を提起されている（「おもろ語考」四）。

つまり、「行きて」の助詞「て」のみが「いぢへ・いぢゑ」のように濁音化している点に言及したもので、「いぢへ・いぢゑ」と清音表記ならば、問題は生じないことになる。では、右の諸例はどう考えるべきか。筆者は、これらの「いぢへ・いぢゑ」は、「出で」の意で解釈すれば、問題は解決すると思う。それでは、「出で」が「いぢへ・いぢゑ」と表記された確実な例を列挙してみる（ちなみに、『おもろさうし』に「出で」を「いぢへ・いぢゑ」と書いた例は計三十余例ある）。

又　きこゑ大ぎみぎや　はつにしが　おしいぢへば　さやはしもはしり　おしみちへれ　ぢやうのしゆ

又　とよむせだかこが　しらみしやが　おしいぢへば（巻七―三四九）

◎『岩波文庫』の大意⇩名高く霊力豊かな聞得大君が、初北風、しら北風が吹き出してくると、斎場嶽の遣り戸を閉めなさい、門番の方よ。

一　あかのおゑつきや　ねはいんおゑつきや　てりいぢゑやり　ちよわれ

又　しものよのぬしや　あぢのまたのあぢや（巻八―四六一）

◎『岩波文庫』の大意⇩阿嘉のお祝付き、饒波大お祝付きは、お祈りをします。下の世の主は、按司の中の按司は、実に立派な方であることよ。按司様は、朝日のように照り出でて、輝いてましませ。

Hosei University Repository

従来の「行って」を「出で」に変更すれば、一覧したⓑの「いぢへ・いぢゑ」が濁音になっている表記上の矛盾も解消するし、かつまた「出で」には「外に出て行く」意があるのだから、「行って」を「出で」に改めてもすべて同様の解釈が可能となる。

三

ⓒ一　……とも、すゑ　これど　いちゑ　とよむ（巻五―二四六）

◎『岩波文庫』の大意⇩千年も末長く、このことをぞ言い伝えて鳴り轟くことだ。

一　……とも、すゑ　これど　いちゑ　とよむ（巻五―二四七）

◎『岩波文庫』の大意⇩千年も末長く、このことをぞ言い伝えて鳴り轟くことだ。

一　……これ　いちゑ　あんじおそい　はやせ（巻五―二五二）

◎『岩波文庫』の大意⇩これを言い伝えて国王様を盛んにさせよ。

一　……とも、すゑ　これど　いちへ　とよま（巻五―二七八）

◎『岩波文庫』の大意⇩千年も末長くこれぞ言い伝えて鳴り轟こう。

Hosei University Repository

又　いつかて、　いちへ　やほう　ひちへ

又　はやくて、　いちへ　やほう（巻一一―六四一［重複オモロあり］）

◎『岩波文庫』の大意⇩船出はいつか、早く、といって、弥帆を引いて

一　……で　わん　これ　いちへ　はりやに（巻一三―七六九）

◎『岩波文庫』の大意⇩いざ、私はこれに唱和して船を走らせよう。

一　なよくらが　もちよろ　せだかこに　いちへ　おやせ（巻一三―七八一）

◎『岩波文庫』の大意⇩なよくら神女がきらめき輝いて美しいことよ。霊力豊かなお方に聖なる言葉を伝えて差しあげよ。

一　……きや　かまくら　これど　いちへ　とよま（巻一六―一一三四）

◎『岩波文庫』の大意⇩大和の京、鎌倉にまで、これをぞいい囃して鳴り轟かそう。

右の「いちへ・いちゑ」に対して、『思想大系』と『岩波文庫』は、いずれも「言ちへ・言ちゑ」の漢字を当てており、『動詞の研究』も一四七頁で次のように述べる。

＊間宮厚司氏は、これらの接続形は他のハ行四段の接続形と異なることから、「行きて」の解釈を疑問付きで提案されている（『おもろさうし』における四段動詞の再構連用形について）。しかし、「いて」という形が、語幹

Hosei University Repository

の「い」の影響で「いちへ」と口蓋化したと考えるのが適当である。

ⓒの「いちへ・いちゑ」を再度見直すと、「言って」でも「行って」でも筆者には文脈の通りが悪いように思われる。例えば、「いつかて、いちへ……はやくて、いちへ」の「て、」は「と言って」の縮まった語形だから、これに「言って」が続くのは「と言って、言って」と重言になってしまい、受け入れにくい。

筆者は、ⓒの「いちへ・いちゑ」は感動詞「いで」（他に対して希望したり、勧誘する気持ちを表す）が、「い」の影響で「いちへ・いちゑ」となったものと考えたい。古写本では実際の発音が濁音であっても濁点を付さない例は数多くあるから、「いちへ・いちゑ」表記を「いぢへ・いぢゑ」に改めることは何ら問題ない。

ところで、「いで」が「いぢへ・いぢゑ」に音変化したと推定するのに参考となる語が存する。それは感動詞「いざ」が、「いぢや」と口蓋化表記された次の例である。

又　いぢや　やけな中みちぢよ　いきやしよ（巻一四―九九六）

◎『岩波文庫』の大意⇨えーい、屋慶名中道こそ行こうよ。

さらに、『おもろさうし』には感動詞「で」が九例見られるので、いくつか示そう。

一　……で　わん　おぎも　はやさ（巻一一―五七五［重複オモロあり］）

◎『岩波文庫』の大意⇨さあ、私は按司様の心意気を盛んにしてあげよう。

Hosei University Repository

一　……で　わん　おぎもに　しなは（巻一一―六〇七［重複オモロあり］）

◎『岩波文庫』の大意⇩さあ、私も若按司のお心に撓い、和合しよう。

一　まころこが　もちなし　よりあげもり　おれわちへ　で　わん　わん　かぐらぎやめ　とよま（巻二一―一五〇二）

◎『岩波文庫』の大意⇩真ころ子様のもてなしであるよ。寄り上げ杜に降り給いて、いざ、私は、天上の神座まで鳴り轟こう。

このうち、「で→はやさ」と「で→とよま」は、いま問題にしているⓒの「いぢゑ→はやせ」と「いぢへ→とよま」に相通じる表現であり、「さあ」の意で解釈しても違和感はない。むしろ、従来の「言い伝えて国王様を盛んにさせよ」や「言い伝えて鳴り轟こう」のほうが、「伝えて」の訳語を補わねばならず、不自然な表現ではないか。

以上、ここではⓒの「いぢへ・いぢゑ」を、感動詞「いで」（他に対して希望したり、勧誘する気持ちを表す）と考える新たな見方を提起しておく。

四

ⓓ一　たまとりに　あつる　うるわしはな　おちへ　うらとよむまちらす　つけれ

又　せるましに　あつる（巻一九―一三二九［重複オモロあり］）

◎『岩波文庫』の大意⇩玉とりに、せるましに在る、美しい花を折って、島じゅうに評判のまちらす神女に付け

Hosei University Repository

よ。

右の「おちへ」を、『思想大系』と『岩波文庫』はどちらも「折って」と解釈するが、『動詞の研究』は二四〇頁で左記のように説明する。

＊重複の〈二〇の六二〉では「おちゑ」とある。『辞典』は「折って」とする。しかし、ラ行四段動詞の他の例からすると、「おて」となるのが普通である。現在も'uti である（『沖縄語辞典』）。「おちへ・おちゑ」なら、「（麗しい花模様を）うって（ママ）（織っての意）」、「（麗しい花を）置いて」、「（麗しい花を）押して」などが考えやすい。未詳。

『動詞の研究』の指摘するとおり、「おちへ・おちゑ」表記を、「折って」と見るのはラ行四段動詞であるから無理がある。しかし、「織って」にしてもラ行四段動詞なので、これも「おて」表記にならねばならずまずい。一方、「置いて」とか「押して」ならば、「おちへ・おちゑ」表記になるが、「麗しい花を置いて、島じゅうに評判のまちらす神女に付けよ」や「麗しい花を押して、島じゅうに評判のまちらす神女に付けよ」では、文脈上どうもしっくりとしない。

そこで筆者は、「おて」を「招（を）きて」と考える新見を提出したい（『おもろさうし』では「お」と「を」は混用されている）。「をく」はカ行四段動詞だから、「おちへ」表記になる。「をく」は「招き寄せる」意を表し、『万葉集』に次の例が見られる。

Hosei University Repository

正月立ち春の来らばかくしこそ梅を招き（乎岐）つつ楽しき終へめ（万五・八一五）
三冬継ぎ春は来れど梅の花君にしあらねば招く（遠久）人もなし（万一七・三九〇一）
春のうちの楽しき終へは梅の花手折り招き（乎伎）つつ遊ぶにあるべし（万一九・四一七四）

これら三例は、いずれも梅を擬人化して、「梅の花を招き寄せる」と歌う。要するに、「花を招く」という表現をとっているのである。ならば、ⓓの「うるわしはな　おちへ　うらとよむまちらす　つけれ」は、「麗しい花を招き寄せて、島じゅうに評判のまちらす神女に付けよ」と解釈され、「おちへ」という表記面からも文脈面からも無理がないことになる。

五

ⓔ又　もゝぢやらの　あぐでおちやるこちやぐち　ぢやなもいしゆ　あけたれ（巻一四―九八二）

◎『岩波文庫』の大意⇩たくさんの按司たちが待ち望んでいた庫裡口を、謝名思いこそが開けたのだ。

右の「あぐでおちやる」を『思想大系』は、頭注で「（開き）あぐねていた」と説く。だが、ここはどの古写本を見ても、「あらておちやる」になっている。その点について、『動詞の研究』は二〇五頁で、こう記す。

＊「あらて」について『校本』の頭注に「『く』と『ら』はまぎらわしい。尚本、仲本ともに『ら』だが『く』の誤写であろう」とある。

Hosei University Repository

それから、「あぐでおちやる」の「おちやる」であるが、『思想大系』と『岩波文庫』はどちらも「居ちやる」と解する。しかし、『動詞の研究』が三五頁で、次のように指摘するとおり、ここは表記の法則を考慮するならば、「置ちやる」のほうがよい。

「おちやる」は、従来「居る」の過去形とされているが、その場合は「おたる」となるのが法則であるから、それは少し無理であろう。その点からすると「置ちやる」とするのが自然であろうか。

すると、古写本間に一致して見られる「あらて置ちやる」なのか、それとも誤字を想定した「あぐで置ちやる」なのかを再検討することになる。「あらて置ちやる」で考えられるのは、「洗って置いた」であり、「洗ふ」はハ行四段動詞であるから、「あらて」表記で問題ないし、『おもろさうし』に「洗ふ」の例が見られる。

一　ちばなこしたけに　あらへか　あらへ
又　けよのよかるひに
又　けよのきや〳〵るひに
又　かわら　よせぎいぢゑて
又　てもち　よせぎいぢゑて（巻一四―一〇〇四）

◎『岩波文庫』の大意⇩知花後嶽で、玉洗いの神事をして、玉を洗いに洗い、今日の良き日、輝かしい日に、珈玻羅玉、手持ち玉を洗い清めて、神祭りをするのだ。

Hosei University Repository

けれども、ⓔを「たくさんの按司たちが洗って置いた庫裡口を、謝名思いこそが開けたのだ」というのはどうも腑に落ちない。庫裡口とは、「倉、納戸などの出入り口。財宝を入れた倉の扉の意」であると、『岩波文庫』の当該歌の脚注に解説が見られる。その庫裡口を多くの按司（政治的支配者達）が洗って置き、それを謝名思い（察度王）が開けたというのは、ちょっと考えにくい。

では、誤字の「あぐで置ちやる」はどうかというと、「倦（あぐ）む」はマ行四段動詞だから、「あぐで」表記でまったく差し支えないし、『おもろさうし』には動詞「あぐむ」の例がある。とりわけ、「あぐでおちやる」という句があるのは注目に値しよう。

又　あぐでおちやる　かうちぢよ　そで　たれて　わたる（巻一三―七五〇）

◎『岩波文庫』の大意⇩待ち焦がれていた交趾（ベトナム）へこそ順調に航海したのだ。

一　あがおもひぎや　あぐでおちやる　なごのうら　たゞひとり　やたもの　おもいはの　きもちやさ

又　あがおもひぎや　すまておちやる　きせのうら（巻一四―九九七）

◎『岩波文庫』の大意⇩わが思い人が待ち望んでいた名護の浦に、住んでいた喜瀬の浦に、ただ一人だけで行かせたものだから、それを思うほどに心が痛むことよ。

右の『岩波文庫』の大意を見ると、「あぐでおちやる」を「待ち望んでいた」意で解釈しているが、「あぐむ」とは「ある物事をしようとしても、それができずに困っている」意である。したがって、「倦んで置いた」は厳密には「で

Hosei University Repository

きず、そのままにしておいた」と解すべきである。そうするとⓔは、「たくさんの按司たちが開けられず、そのままにしておいた庫裡口を、謝名思いこそが開けたのだ」という意味になる。

六

ⓕ一　よなばるおきて　しろことよたしゆ　おがちやる　まさり　みたれば　かなしや

又　しま中おきて　みれつなおきて

又　いなくにに　つかい　いなみね　つかい（巻一四―一〇三七）

◎『岩波文庫』の大意⇩与那原掟であるしろこ鳴響た主は、お目にかかると勝れた方である。よく見ると、ますます立派であることよ。島中掟、みれつな掟を、稲国に、稲嶺に使いを出してお招きしたよ。

この「おがちやる」に、『思想大系』と『岩波文庫』は、「拝ちやる」と漢字を当てるが、『動詞の研究』は二〇九頁で次のごとく述べる。

＊尚本・ア本には「ありちやる」、仲本・伊本には「あかちやる」とある。『辞典』は「おかちやる」（「拝みたる」の音変化した形）の誤写とする。『全釈』は「有りたる」とする。今後の検討を要する。

筆者は、現存最古の古写本『尚家本おもろさうし』に見られる「ありちやる」を本文に採用したい（ちなみに『定本おもろさうし』も決定本文を「ありちやる」にしている）。この「ありちやる」は、カ行四段動詞の「ありく」に

Hosei University Repository

完了・存続の助動詞「たり」が接続したものではないか。つまり、「ありきたる」が音変化して、「ありちやる」になったと考えれば、表記上の問題はない（なぜなら、カ行四段動詞に「たる」が接続する場合は、連用形語尾が脱落し、「ちやる」になるから）。

「ありく」については、『岩波古語辞典・補訂版』が見出し語「ありき」【歩き】の項で次のように解説する。

《あちこち動きまわる意。犬猫の歩きまわること、人が乗物で方方に出かけてまわることにもいう。平安女流文学で多く使い、万葉集や漢文訓読体ではアルキを使う。類義語アユミは一歩一歩足を運ぶ意》（中略）②あちこち訪問する。「よろこびに所所―・き給ひて」〈源氏宿木〉

以上を踏まえてⓕを解釈すると、「与那原掟であるしろこ鳴響た主が、あちこちご訪問なさっている素晴らしいお姿を見ると、ご立派である」となる。二つ目の「又」記号に、「いなくにに　つかい　いなみね　つかい」とあるから、「使い」という語と訪問する意の「ありく」が、呼応していると見ることもできよう。

『岩波文庫』の「与那原掟であるしろこ鳴響た主は、お目にかかると勝れた方である」という大意もわからなくはないが、「拝みたる」で果たして「お目にかかる」の意になり得るのか。加えて、もし「おがみたる」であるならば、「拝む」はマ行四段動詞だから、「たる」は口蓋化を起こさない「おがたる」表記になるはずであり、これは表記の法則に背く。結局、筆者には納得がいかなかったので、誤字を想定しない試案を提示してみた。

Hosei University Repository

おわりに

近年、『おもろさうし』研究は飛躍的に進んだ。それは外間守善の四十年以上にわたる地道な努力が結実した結果にほかならない。特に、外間守善校注『おもろさうし(上)・(下)』(岩波文庫、二〇〇〇年三月・一一月)は、待望の完訳テキストで、非常に有益である。二十一世紀は、この『岩波文庫』をベースにした注釈書がいくつか出版される世紀になりそうな予感がする。研究は、年々確実に進む。それは三十年ほど前の、外間守善・西郷信綱『日本思想大系18・おもろさうし』(岩波書店、一九七二年一二月)の頭注と、今回の『岩波文庫』の脚注とを見比べれば、一目瞭然だ(例えば本稿の「一」で紹介した「もて」表記の語意を「持て」から「盛て」に訂正した例など)。

本稿では、その『思想大系』と『岩波文庫』とで、一致した解釈がなされている動詞について、筆者が疑念を持った動詞を取り上げて考察した。最後に整理すると、次のようにまとめられる。

①「いぢへ・いぢゑ」の語意を、「行て」から「出で」に改める案。
②「いちへ・いちゑ」の語意を、「言て」から感動詞「いで」に改める案。
③「おちへ・おちゑ」の語意を、「折て」から「招て」に改める案。
④「あぐでおちやる」の語意を、「倦で居たる」から「倦で置たる」に改める案。
⑤誤字を想定した「おがちやる(拝たる)」を、古写本の「ありちやる」で「歩たる」に改める案。

このように従来の説に対して、問題があると思われる語について新たな解釈を示したが、『おもろさうし』には未

Hosei University Repository

解決の問題が山積している。残された問題については、引き続き考究を重ねていきたい。